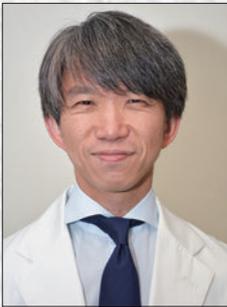


痒みのある皮膚疾患

羅針盤

痒み治療の未来を切り拓く パラダイムシフト



石氏 陽三

Ishijiri Yozo

東京慈恵会医科大学皮膚科学講座

痒みは、単なる「不快な感覚」ではない。強い痒みは、睡眠障害や自殺企図もひきおこす可能性があり、QOLを大きく損なう深刻な症状である。長らく痒みの主要な誘発因子は、ヒスタミンと認識されていた。しかし、アトピー性皮膚炎や結節性痒疹など痒みが問題となる多くの皮膚疾患では、抗ヒスタミン薬の治療効果が乏しいことが知られていた。そのため、ヒスタミン以外の起痒物質の特定とそれに対する治療薬が求められていた。近年のさまざまな研究の進歩により、ヒスタミン以外の痒みのメカニズムも明らかにされてきている。それに伴い、ヒスタミン以外の因子をターゲットとした治療が次々に開発された。その結果、今まで治療抵抗性であったヒスタミン以外の痒みで苦しんでいる患者も救うことができるようになってきた。このように、以前は難治とされていた痒みが治療できる時代となり、痒み治療のパラダイムシフトがおきている。さらに今後も新薬が登場する予定である。本特集では、現時点で明らかにされている痒みのメカニズムと痒みに効果が期待できる新薬を確認したい。

まず、痒み研究、治療の変遷について理解し、そして最新の痒みのメカニズムを確認する。痒みは、

皮膚から脊髄後角を通り、脳へと伝達される。この末梢から中枢までの一連の経路が明らかにされている。痒みを伝える末梢神経が複数存在すること、脊髄や脳においても痒みのシグナルが制御されていることもわかっている。また、人間には、内在的に痒みの抑制機構が存在する。痒みと痛みは、その異同が議論されてきたが、本特集では両者のバランスについても確認したい。近年、サイトカインが中心となる化学的な痒みだけではなく、機械的な刺激で誘発される痒みのメカニズムも明らかにされてきている。さらに、アトピー性皮膚炎や結節性痒疹などの慢性的に痒痒をひきおこすさまざまな皮膚疾患の病態や、難治性痒疹のメカニズムも明らかにされている。また、肝機能障害や腎機能障害など多種の内臓疾患の痒みのメカニズムも個々の病態が明らかにされてきた。これらの病態を踏まえて新薬が開発され、その結果、今までは難治とされてきた痒みに効果的なJAK阻害薬、抗体製剤やオピオイドなどが登場した。

本特集では、これらの最新の痒みのメカニズムと治療方法を各分野のスペシャリストの先生方にご執筆いただくことができた。本特集を読んでいただければ、現時点での最新の痒みのメカニズムと治療が理解できるようになっている。読者の先生方のご興味のあるパートだけでもよいので、ご一読いただければと思っている。

このように科学の進歩は、痒み治療を新しいステージへと押し上げた。本特集を通じて、痒みのメカニズムや最新の治療方法について理解を深めていただき、患者さんに合った治療を選べる一助となれば幸いである。最後に、患者さんがどれだけ痒みで苦しんでいるか、一人ひとりの痒みを評価していただきたい。そして、一人でも多くの患者さんに適切な痒み治療が届き、その結果、痒みから解放され、快適な生活を取り戻せることを心から願っている。